単身高齢者のライフストーリーにみるインフォーマルサポートの変容

北星学園大学大学院　畠山　明子（7568）

［キーワード］単身高齢者、ライフストーリー、インフォーマルサポート

１．研究目的

本研究は、ライフストーリー事例をもちいて家族と近隣住民や友人らが果たしてきたインフォーマルサポートの変容について単身高齢者の分析をおこない、その特徴を明らかにすることで孤立化問題への課題を提起する。

２．研究の視点および方法

（1）　研究の視点

今日のわが国における高齢者ケアは、家族、近隣住民や友人等のインフォーマルサポートと介護保険サービスに代表される公的サービス等のフォーマルケアが組み合わせによって提供されている（冷水ら 2009）。中でも高齢者のインフォーマルサポートは家族（子ども）による支援関係が選好（古谷野 2009;安達 2010 等）されてきた。近年の小家族化、単身高齢者の顕著な増加にともない、子どもと離れて暮らす高齢者は決して少数派ではなくなった（中川 2006）。そのため、このような高齢者の元に通い、必要なサポートを提供する家族による「遠距離介護」（太田 1998）や「通い介護（家族）」（松下ら 2007）が見られるようになった。とくに、山間地の高齢者は通い家族の日常生活全般のサポートにより、日々の暮らしを維持している（米増ら 2009）ことも明らかにされた。しかしながら、家族が何らかの要因によりその機能が果たすことができないとき、単身高齢者はサポートの担い手として誰を志向してきたのだろうか。山口ら（2011）は、単身高齢者を孤立させることなく支えていく実践的な方策および研究の課題について考察する必要性を提起している。孤立や孤独死の防止、あるいは、緊急対応の際、日常的な声かけや見守りの体制（山口ら 2011）を契機として発生する近隣住民や友人など非親族関係が機能しているかが重要となる。単身高齢者の人生の中で、どのような他者と関係を取り持ち、その地域での生活を継続してきたのかを明らかにするには、社会関係の可変性・持続性のプロセスを導入することにより、単身高齢者の新たな他者との関係維持パターンとして浮き彫りにされると考えられる。本研究では、単身高齢者のサポートモデルの概要を把握するために、単身高齢者のインフォーマルサポートの内容とその変化を取り上げる。具体的には、他者選択における意味付けや評価および「家族であること」による関わり方や他のインフォーマルサポートとの支援形態の違いを考察する。

（2）　研究の方法

本研究は、旧産炭地X市に住む単身高齢者10名を対象に実施したインタビュー調査の結果をもちいている。調査は2008年10～12月（予備調査女性3ケース）および2011年6～7月（男性2ケース、女性5ケース）に実施した。インタビュー内容は、ICレコーダーによる録音許可を得、全ケースについて逐語録を作成した。この逐語録に基づいて、対象者のライフヒストリーと親族（家族）関係と近隣および友人関係としての非親族関係の変遷を整理した。関係推移の実態と対象者のライフストーリーから、インフォーマルサポートの変容過程を明らかにする。

３．倫理的配慮

本研究にもちいている事例に関しては、対象者を特定できないよう、匿名化している。また、調査の概要と個人情報の保護・事例の取り扱いについて、対象者の選定を依頼したX市在宅介護支援事業所のケアマネジャーに文書にて説明した。併せて、調査対象者にも口頭・文書にて説明し、改めて調査協力に関する意思を問うた上で承諾書を取り交わした。

４．研究結果

（1）親族・非親族のインフォーマルサポートについて

・入院・治療が必要な時に家族（特に子ども）によるサポートが提供される⇔近隣住民や友人が介護を担う機会は少ない。

・特に、近居や近隣市町村（おおむね自動車で30分程度の距離）に子どもがいる場合、通院や買い物など日常のサポートをしている。多少距離がある場合は、単身の子どもが動きを取りやすい。

・介護や訪問しに来る家族について→子どもも親もともに高齢化しており、子どもは遠方の親を見舞うことが難しくなり、親はあまり迷惑をかけたくないと思っている。

・自分の死後、子どもに面倒をかけることのないように身辺整理をおこなっている。

・日常的な困り事や緊急時の対応は、年齢の近い近隣住民に依頼している。

（2）関係変化の特徴

・別居子との親密な関係が断ち切れることなく継続している。特に、入院時や在宅での身体的な介護等を要する場合、別居子がサポートを担う。

・特に、女性高齢者の場合、夫が存命であった頃から、自分だけでなく配偶者側のきょうだい関係も大切にしていた。近隣市町村に居住しているケースでは、配偶者との死別後にきょうだいやおい・めいと買い物の介助など具体的なサポートでつながっている。

・近隣及び友人関係は、関係の喪失及び継続と新たな関係の創出によって成り立っている。関係が喪失の要因は、相手の死亡や自身の病気であった。新たな関係が作られる際、または関係が親密になる際、加齢に伴う疾患の発症がきっかけとなっていた（近隣関係の発生契機の一例）。

・入居者の転入出が多い地域では居住している年齢層が多様であるため、隣人が仕事を持つ若い人たちであるケースでは、サポートにつながる近隣関係は形成されにくい。

・いったん近隣関係が喪失すると、新たな関係は生みだされにくい。その後の経過について、①他の近隣住民とより親密になるケースと②既存の関係は親密化されず、新たな関係も形成されないケースが見られた。とりわけ、②のケースは子どもが遠方に住み、年数回しか訪問しないため、介護サービス事業所スタッフ以外との関係が疎遠になっている。

５．考察

事例の中で、親ならびに親の元を訪問する別居子の高齢化問題が浮き彫りにされた。子どもを頼りたくても頼りにできない場合、誰がその代わりを担うのかを考えることは、単身生活を継続したいという高齢者のコミュニティケアを実現するための大きな課題といえる。

（本報告は、（財）日本興亜福祉財団平成22年度ジェロントロジー研究助成事業による成果の一部をなすものである。）